The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中世低地ドイツ語『パリスとヴィエンナ』試訳（上）
Author(s)	尾崎, 久男
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2014, 2013, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72846
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中世低地ドイツ語『パリスとヴィエンナ』試訳（上）

尾崎久男

[1.]

ここにパリスという勇敢な騎士と権力のある領主ドルフィンの娘でヴィエンナというこの上なく美しい婦人の物語が始まります。パリスとヴィエンナは抱き合う誠実な愛のためにたくさんの不幸と悲しみに耐え、幸せな結末を迎えたのでした。

フランスのカール王の時代、西暦 1271 年、ドルフィンの国のヴィエンナという町にドルフィンという裕福な方旗騎士がいた。彼はゴットハルト・ダレンゾネと呼ばれていた。王族の出身で権力があり、土地と財産において偉大だった。彼は賢くて分別があったので、王は彼を愛していた。そのため、王の顧問の中で彼の右に出る者はいなかった。彼にはディアネという非常に美しい妻がいた。並外れて美しかったので、彼女には「明けの明星」を意味する「ディアネ」という名前がふさわしかった。というのも、どの婦人も持つべき気高さと上品さに満ちていたからだ。ドルフィンとディアネには七年間跡継ぎがなく、彼らはどうしてもそれを望んでいた。跡継ぎが与えられるようにいつも祈っていたので、主なる神は望みをお聞き入れになり、八年目に美しい娘をお与えになった。ドルフィンの国民はみなそれを喜んだ。とても愛されていたので、彼女は生まれた町にちなんで「ヴィエンナ」と名付けられた。世話や教育のために彼女は同じ町の上品な婦人に預けられた。その婦人にもヴィエンナと同じ年のイザベルという娘がいた。イザベルはヴィエンナと一緒に遊んで育った。彼女らは愛し合っていたので、お互いなしではいられず、「姉妹」と呼び合った。ヴィエンナは日一日と非常に美しく成長していったので、ドルフィンの国のみならずイギリスなどでもまた最も美しい乙女とたたえられた。高貴な生まれだったのでいっそうだった。結婚の年齢に達すると、彼女は王や公爵や伯爵に結婚を望まれた。彼らも彼女に求婚するのだった。ドルフィンにはヴィエンナの町に気高い騎士がいた。彼はヤコブといい、上品で高貴な生まれで、土地と城において権力があり、財産も裕福だった。ドルフィンも国民もみな彼を愛していた。この騎士にはパリスという美しい息子がいた。父親は彼が十五才になるまであらゆる技能を教えた。武器の使い方や馬の乗り方も教えた。彼はすぐにドルフィンのもとで騎士の位を授けられるほどになった。馬上試合があると、どこでも参加した。そのため、彼とその名前は国中で知れ渡った。彼は最も優れた騎士の一人とたたえられた。というのも、特に上品にふるまい、ぴかぴかのよろいを身に着け、パーティで陽気だったからだ。彼は狩りのためにいつもハヤブサとタカと犬を飼っていた。そのけいこもたくさんしていたので、伯爵や公爵にもふさわしいほどだった。彼は領主たちと知り合いになった。同じ町にいたエドゥワルトという若い騎士と大の仲良しだった。二人はほぼ同じ年で、心から愛し合っていた。特にフランスで行われる馬上試合に参加した。彼らは試合へ行くと必ず名誉と賞賛を受けて帰って来た。リュートなどの弦楽器を奏でることもできたが、パリスの方がエドゥワルトよりも上手に演奏した。エドゥワルトはブラバントの宮廷にいる乙女に求愛した。パリスはまだ愛が何だか知らなかった。しかし、一年後には領主ドルフィンの娘、麗しのヴィエンナを得ようと努めていた。ヴィエンナほど高貴な身分の生まれではないので、自分の愛は無駄だといつも思っていたが、彼が成長すればするほどいっそう彼女への愛にとらえられるのだった。彼はそれを秘密にしていたので、胸中を打ち明けた仲間エドゥワルトの他はだれも彼の愛に気づいていなかった。麗しのヴィエンナもパリスが愛してくれているのに気づいていなかった。それでも、パリスの彼女への愛は小さくならなかった。

[2.]

パリスとエドゥワルトが弦楽器を奏でて楽しませようとヴィエンナの部屋の前へやって来た様子。

パリスとエドゥワルトはヴィエンナを演奏で楽しませようと意見が一致した。夜にときどきヴィエンナの部屋がある所へ行き、とても心地よく歌ったり奏でたりした。それはあらゆる歌や弦楽器の演奏よりも優れていて、ドルフィンも妻もヴ

ィエンナもとても楽しむほどだった。彼らは大きな楽しみを与えてくれる者の正体を知りたがった。それを知ろうとドルフィンは華やかな祝宴があるのを宣言して、吟遊詩人たちをあらゆる国に遣わした。一人の吟遊詩人も残さず宮廷に連れて来るように命じた。さて、みなが来て演奏を聞いた。捜している者がまだ見つからず、ドルフィンは悲しんだ。祝宴へやって来た吟遊詩人たちの演奏を聞くと、ヴィエンナが侍女イザベルに話した。「誓って、イザベル。この吟遊詩人たちはいつも私たちの部屋の前で演奏していた方たちではないわ。残念ね。あの方たちはだれかしら。だって、私に対する愛のためだけに来ていたんですもの。」

[3.]

パリスとエドゥワルトが演奏のためにヴィエンナの部屋の前へやって来たら、彼らを捕らえようとドルフィンが十人のよろいを身に着けた者を遣わした様子。

娘の言葉を聞くと、ドルフィンは演奏する者たちの正体が知りたいと心中ひそかに思った。彼らがいつも演奏していた場所でひそかに見張らせようと十人のよろいを身に着けた者を遣わした。彼は、もし彼らが来たら演奏させ、それが終わったら前へ連れて来るように命じた。もし進んで来たがらなかったら、力ずくで連れて来るように命じた。さて、薄暗い夜が来ると、二人の若い騎士パリスとエドゥワルトは楽器を運ぶ若者と一緒に来た。この十人のよろいを身に着けた者のことは知らず、これまでのように心地よく演奏し始めた。彼らが演奏を終えて立ち去ろうとすると、十人のよろいを身に着けた者が来て、二人の騎士の所へ行き、領主ドルフィンの前へ一緒に行ってくれるように言った。パリスは答えを少し待ってくれるように頼んだ。彼らは少しわきへ寄った。パリスがエドゥワルトに言った：「エドゥワルト。どんなに危ないか分かっているな。僕のために君が傷ついたり困ったりするのは見たくない。でも、ほんとうに言おう。こんなふうにドルフィン様の前へ連れて行かれるなら、僕はむしろ死んだ方がいいんだ。エドゥワルト。どうしたらいいか考えてみよう。楽器を運ぶ者にも気をつけなきゃな。あいつも捕まったら、僕たちのことを知らせるぞ。」彼らは若者を自分たちの間に入れた。エドゥワルトは言った：「僕の心配はいいから、君のいいようにしよう。」パリスが十人のよろいを身に着けた者に言った：「皆さん、僕たちを放して下さい。僕たちが来たのは領主ドルフィン様と宮廷のみな様のお役に立ちたかったからです。今のところ、ドルフィン様の前へ行きたくはありません。」

[4.]

パリスとエドゥワルトが捕まえようとする十人のよろいを身に着けた者に抵抗した様子。

二人がドルフィンの前へ一緒に行きたがらないのが分かると、十人のよろいを身に着けた者は言った：「いやおうなしに一緒に行ってもらいます。」彼らは短刀に手をやった。二人の騎士は短刀と鉄槌しか武器を持っていなかった。それを使って激しく抵抗したので、十人はみな大きな一撃を受け、いやおうなしに退かねばならなかった。二人の騎士は傷を負わずに逃げた。朝に十人の者は ドルフィンの前へやって来て、二人の騎士が負わせた大けがについて話した。どんなふうに傷つき、どんなふうに逃げねばならなかったかを話した。最初の者は頭に、二番目の者は腕に、三番目の者は腹に傷を負っていた。そう聞くと、ドルフィンは腹を立てたが、威厳のある者に違いないと思った。そこを見張ろうと宮廷で最も優れた百人の者を遣わした。しかし、まったく無駄だった。というのも、二人の若い騎士は戻ってこず、このことを秘密にしたからだ。さて、例の吟遊詩人たちがだれか分からず、ヴィエンナは自分の愛を求める領主たちだろうと考えた。彼女と侍女イザベルはそう話して驚くより他なかった。麗しのヴィエンナに抱く愛を示すことができないので、パリスは完全にあきらめようと思った。聖ラウレンツィウス教会の司教の所へ行くと、司教は彼に大きな敬意を表し、主なる神に仕えるように教えた。さて、例の吟遊詩人たちの正体が分からないので、娘が悲しんでいるのを見て、ドルフィンは娘のためにヴィエンナの町で馬上試合を招集した。ヴィエンナはそれを喜んだ。というのも、自分に対して愛を抱く者がだれか馬上試合で分かると思ったからだ。ドルフィンは馬上試合をする者はみな来る五月一日にヴィエンナの町へやって来るようにフランスとイギリス中に知らせた。馬上試合で最も力があることを示して賞をもらった者に

高価な水晶の楯と花冠を与えようとした。その日に向けてフランスとイギリスとフランドルの領主や騎士、特にその美しさのためにヴィエンナを愛しているフランスとイギリスの方旗騎士が用意した。その中にフランス王の甥ブルボンのヨハン、イギリス王の息子エドゥワルト、プロヴァンス伯爵の息子アントニウス、モンフェラン辺境伯の息子ゲラルド、カルエ公爵の息子ヴィレムがいた。この方旗騎士はみな麗しのヴィエンナのために来て、男らしさを示す用意がみごとにできていた。馬上試合があるのを知ると、パリスは行こうか行くまいか、どうしたらいいか考えた。しかし、ヴィエンナに抱く愛のために自制していたので、自分自身では分からなかった。彼は仲間エドゥワルトと一緒に用意したが、エドゥワルトが答えた：「君が行くなら、一緒に行こう。でも、人に知られないように、こっそり覆い隠して行かなきゃ。」彼らは甲冑と馬と武器を用意した。馬の覆いをすべて白くして、その他は何も使わなかった。祝宴を予定していた日が来ると、ドルフィンは高い観覧席を作った。ヴィエンナもみごとに着飾っていた。彼女がとても美しく見えたので、人はみなその美しさに驚いた。領主や騎士は国の慣習に従ってみごとなよろいを身に着け用意した。あらゆる弦楽器とラッパを演奏するみごとな吟遊詩人がいた。ヴィエンナは自分への愛のために部屋の前で心地よく演奏していた者がその中にいるかとても注意深く聞いた。パリスにはドルフィンの食卓で奉仕するために一日が割り当てられた。彼は喜んで熱心に務めを果たした。奉仕していると、彼はいつも視線をヴィエンナの方に向けていて、その愛が彼の中でますます大きくなった。彼はなおそれを秘密にしていたので、だれにも気づかれなかった。

[5.]

パリスがヴィエンナの町で馬上試合に勝った様子。

馬上試合が行われる日が来ると、どの領主も侯爵も試合場への用意をした。パリスとエドゥワルトはある場所を見つけてひそかに用意した。全身真っ白で試合場へやって来て端に馬を止めたので、だれにも彼らだと分からなかった。二人はみごとなよろいを身に着け用意した。真っ白で用意した二人の騎士を除いて、方旗騎士や騎士はみな紋章で見分けられた。馬上試合が始まる前に、ドルフィンは試合場に姿を見せるように命じた。みなが姿を見せると、人はみなみごとに用意ができていると言った。特にイギリス王の息子エドゥワルトは豪華に用意した。この騎士みなを見ると、ヴィエンナが侍女イザベルに話した：「イザベル。この領主の中でどなたが最も好ましくて男らしいかしら。」イザベルが答えた：「尊いヴィエンナ様。銀のライオンの紋章を付けた方がどなたよりも好ましく思えます。」「ほんとうに。」とヴィエンナは言った。「私は紋章を付けていない二人の白い騎士がどなたよりも優雅に馬上試合をすると思うわ。でも、すぐに分かるでしょう。」騎士はみな紋章を見せるように付けていた。最初に来たのは金の王冠の紋章を付けた騎士だった。彼は大胆で男らしかった。それに対して来たのはパリスの仲間で高貴な騎士エドゥワルトだった。男らしく突進し合ったので、二人は槍を折ってしまった。他の二人が一緒に来た。一方は落馬したが、他方は華やかに座ったままだった。激しくぶつかり合ったので、人も馬も地面に倒れることもあった。だれもが賞をもらおうと考えていた。それから来たのはイギリス王の息子エドゥワルトだった。彼はたくさんの騎士から賞賛を受けていた。それに対して来たのは力の強い騎士パリスだった。彼はすばらしい馬上試合をした。そのエドゥワルトを男らしく馬から地面に突き落とした。彼に大きな賞賛が与えられた。これは午後の間ずっと行われた。夕方になると、領主たちはとても疲れて、だれもがじっと休む場所を探した。しかし、パリスはよろいを身に着けたまま午前よりもたくさんの奇跡を行ったので、試合場ではだれもあえて彼に向かって行かなかった。そのため、彼が賞をもらった。

[6.]

賞をもらった者としてパリスに水晶の楯とバラの冠が与えられた様子。

馬上試合が終わると、紋章を身に付けていない二人の騎士に大きな賞賛と名誉が与えられた。パリスはヴィエンナがいる観覧席へ連れて行かれた。彼女は自分の手で彼に水晶の楯とバラの冠を与えた。パリスと仲間エドゥワルトはできる限りひそかに立ち去り、以前よろいを身に着けた所へ行ってよろいを外した。方旗騎士や騎士はみな紋

章を身に付けていない二人の騎士の男らしさと騎士らしさについてまだ話していた。ドルフィンも領主たちも彼らの正体を知りたがった。しかし、ひそかに立ち去ったので、だれも彼らの居場所を知らなかったし、また気づきもしなかった。

[7.]

どの領主も国に戻った。ドルフィンが催した馬上試合、さらに紋章を身に付けていない二人の騎士が示した男らしさ、またヴィエンナの非常な美しさも忘れることができなかった。話しているうちに、フランスとイギリスの方旗騎士と騎士の間に争いが起こった。というのも、美しさにおいてノルマンディー公爵の娘を好ましく思う者がいたからだ。イギリス王の姉妹を好ましく思い、彼女がヴィエンナの町のドルフィンの娘ヴィエンナよりも美しいと言う者もいた。それに反対して、ヴィエンナがはるかに美しく、美しさにかけて最も優っていると言う者もいた。ドルフィンは馬上試合を華やかに終わらせたので、その名前は日一日とますます広まった。ヴィエンナも男らしく賞をもらった者がだれかいつも考えていた。侍女イザベルに言った：「誓って、イザベル。私から水晶の楯と冠を受けたのは毎夜部屋の前で歌ったり演奏したりしていた者よ。私の心がそう言うの。誓って、イザベル。権力があって賢明で用心深い騎士で、とても威厳のある者よ。ほんとうに言うわ。私の心も考えも愛も望みもすべてあの者のものよ。あの者の居場所が分からないうちは納得できないわ。これよりも私を喜ばせられる話題はありえないの。」彼女はため息をついて嘆いた。というのも、今までそんなことが心まで届いたことはなかったからだ。パリスはこれを知らなかった。というのも、自分の愛を心の中で秘密にして、あえてだれにも打ち明けなかったからだ。彼はとても悲しそうに暮らしていた。いつも聖ラウレンツィウス教会の司教と一緒にいて、いつも彼のあとについて行った。馬上試合を見ていた父親ヤコブは息子パリスが参加しているのを知らなかった。彼にはそれが悲しかった。彼は言った：「パリスよ。お前が以前のようにはつらつとしたり、上機嫌でいないのが私には悲しいんだ。昔は馬上試合を行って賞賛と名誉を受けるのが常だったのに。今やお前は厄介な司教の所へ通いすぎて自制できなくなっている。あの者はお前を聖職者にしようとしているんだ。人をひどい目に遭わせたのであれ、お前がひどい目に遭ったのであれ、お前がそれを後悔しているかどうかも私には分からない。パリスよ、若い頃に受けたいい評判と賞賛を失わないでくれ。」パリスは父親に一言も答えなかった。いつもヴィエンナを思ってそれを秘密にしていたので、だれにも気づかれなかった。

[8.]

さあ、みなさんは三人の若い乙女について方旗騎士の間で大きな争いが起こったとお聞きになりました。というのも、フランドル伯爵の息子がブレンの兄弟に腹を立てたからです。彼らは激しく戦いましたから、どちらが乙女の美しさの争いに勝つか決めかねたのです。ある日のことノルマンディー公爵の娘フローラが世界で最も美しい乙女だということで戦う用意のできた五人の騎士が遣わされた。もう五人の者が遣わされたが、イギリス王の姉妹コンスタンツがなお美しいと言っていた。もう五人の騎士が立ち上がったが、ドルフィンの娘、麗しのヴィエンナが最も美しいと思っていた。この争いがフランス王の前で起こると、顧問の中にはここから大きなわざわいが生じて方旗騎士の間の争いが大きな心配事になると言う者もいた。王はみなに前へやって来るように命じ、だれもが納得するようにすべてを調停しようとした。みながこれに同意して、王の前へやって来た。彼らが来ると、王はすぐに三人の乙女のために馬上試合を決めた。九月八日にみな用意して、馬に乗り甲冑を着て武装してパリの町へやって来るように命じた。馬上試合で最も男らしさを示す者が自分と乙女のために賞を受けることになった。そのためにその者は馬上試合をしたのだった。王は三人の乙女の騎士に乙女へのあかしの宝石を持って馬上試合へやって来るように伝えた。それは馬上試合で最も勇敢さを示した者に与えられ、その者は賞賛と勝利のしるしとして紋章にすることができた。イギリス王は姉妹コンスタンツのためにあかしの宝石として真珠と宝石でいっぱいの金の王冠を送った。ノルマンディー公爵は娘フローラのためにあかしの宝石として豪華な宝に値するいろいろな色の宝石でいっぱいの美しいフランスの帽子を送った。ドルフィンは娘ヴィエンナのためにあかしの宝石として高価な宝にも値する宝石が入り交じった首飾りを

送った。妻としたフランドル伯爵令嬢が以前彼に送ってくれたものだった。この三つの宝石はフランス王に預けられた。その日に向けてどんなふうに威勢よく用意ができるか騎士たちは昼も夜も考えた。というのも、ほんとうにフランスでは長い間その日ほど気高く高貴な生まれの侯爵や方旗騎士や騎士が大勢集まったことがなかったからだ。フランスとイギリスとノルマンディーのほとんどの侯爵や方旗騎士がいた。だれもが言ったことを守って果たそうと努力した。方旗騎士たちは紋章で区別できるようにしたので、どの者も見分けることができた。特にコンスタンツの美しさをたたえる勇敢で男らしい騎士がたくさんいたので、彼女が馬上試合で賞賛と栄誉を受けると噂されていた。パリスはヴィエンナの町にいて、馬上試合が行われるのを知っていた。馬上試合に参加しようか仲間エドゥワルトに相談した。エドゥワルトは参加しても、覆い隠すように勧めて言った：「もし神が君に賞をお与えになったら、君はなお大きな栄誉を受ける。でも、もし覆い隠さずに行ったら、ドルフィン様や領主たちは君だと分かる。君が領主ほど高貴ではないから、君を顧みなくなる。もしヴィエンナ様が君の男らしさのために賞賛を受けても、彼女は軽んじられる。でも、もし無名の騎士によって栄誉と賞賛を受けたら、自分のためにこんな行いをしてくれた者にますます心を寄せるよ。だからできる限りこっそり覆い隠した方がいいんだ。君が試合場から賞を持ち帰れればいいんだけど。もし君が参加しないなら、僕が代わりに行ってヴィエンナ様を見捨てないように僕の力を証明しよう。」パリスは忠告に従った。彼らはできる限り豪華に用意した。王は食べ物や他にも必要なものについて高価なものを用意させ、馬上試合が行われる試合場を準備させた。馬上試合が行われる原因になった婦人や乙女が立っていられるように周囲にたくさんの観覧席を作らせたが、彼女らが行くことはなかった。王は三本の高価な軍旗を作らせた。第一の軍旗は白くて、金色の文字で書いてあった：「ヴィエンナの領主ドルフィン、ゴットハルト・ダレンゾネ様のご令嬢ヴィエンナ。」第二の軍旗は赤くて、金色の文字で書いてあった：「イギリス王のご令妹コンスタンツ。」第三の軍旗も赤くて、金色の文字で書いてあった：「ノルマンディー公爵のご令嬢フローラ。」王は馬上試合で領主を三つのグループに分け、どのグループにも三本の軍旗の一本を与えた。互いの言うことに耳を傾けるように命じた。馬上試合が行われるおよそ二日前に参加するたくさんの者のために観覧席で場所を取る者もいた。

[9.]

九月四日が来て用意ができると、領主たちはパリへ移ったが、フランスにこれほど侯爵や領主や騎士が集まったのを見たことがないほどだった。ある者は紋章を見ようと、ある者は馬上試合を見ようと、人があらゆる国から集まって来た。予定した日が来ると、朝に王は三つのあかしの宝石を軍旗にくくりつけさせた。それは真珠や宝石で光っていた。さて、だれもが試合場へやって来ると、王は観覧席へ行き、だれもが聞こえるように大声で話した：「ここに集まり、よろいを身に着けて馬上試合をする騎士と方旗騎士よ。どの者もあかしが入った軍旗の下へ行くように。婦人のために馬上試合を行い、美しさを証明してもらいたい。試合場ではしかるべく愛と礼儀を保つように。それでも、自分がたたえ、最も美しいと思う乙女のために馬上試合をしてもらいたい。戦いに勝つ者は馬上試合で賞をもらうことになるのだ。その乙女は世界で最も美しいとたたえられ、イギリスとフランスとノルマンディーの名誉を受けることになるぞ。だれも異議を唱えないでもらいたい。命を失うことも禁じるからな。イギリス王が送ってくれたこの美しい王冠を見よ。馬上試合で乙女のために賞をもらう者に与えられるのだ。馬上試合で賞をもらう騎士は宝石が付いた三本の軍旗もすべて受けることになるぞ。」最初にノルマンディーの軍旗の下に立っている者が、コンスタンツの軍旗の者が、それからヴィエンナの軍旗の者が馬上試合で姿を現すように命じられた。集まった領主や騎士の名前を挙げると、あまりにも長くなりすぎるだろう。というのも、たくさんの者が能力と人物を試そうとスペインやアラゴンからやって来たからだ。ノルマンディーの軍旗の下に以下の身分の高い者たちがいた：最初にフランドル伯爵の息子ヨハン、気高いフランス王の甥バイゲルンのフィーリップス、ブルグント公爵の息子エドゥワルト、アルマーニャック伯爵の息子ヨハン、サルース伯爵の兄弟バラクスス、ピカルディー公爵の息子ゴットハルト、たくさんの将軍が続

いた。コンスタンツの軍旗が来た。その中にこの者たちがいた：ブレヴァイス公爵の息子ヨハン、フォイス伯爵の兄弟ガストロモント・ドゥ・ガストリー、カルエ公爵の息子アントーニウス・アレグレ、ブルグント公爵の甥ラーレル、ブラバントのたたえられたヨハン、辺境伯の兄弟ソロモン・ダレンゾネ。たくさんの方旗騎士や騎士が続いた。麗しのヴィエンナの軍旗が来た。その中にブルボン公爵の息子フーゴー、イギリス王の息子エドゥワルト、バリ公爵の息子ヴィレム、プロヴァンス公爵の息子アントーニウス、ヴィエンナのヤコブの息子パリス、辺境伯の息子ドルマンデ・フォン・モンテフェラント、カルエ公爵の三人の息子、ノルマンディー公爵の息子ヨハン・ペリユーがいた。そのあとにたくさんの領主や騎士がよろいを身に着け用意して来た。みなが姿を見せると、どの軍旗も割り当てられた場所に戻った。新たに武器を用意したばかりの領主みなに大きな喜びが見られた。ドルフィンもヤコブも来て、馬上試合の経過を見守った。

[10.]

パリスがパリの町の馬上試合で勝った様子。

九時に馬上試合が始まった。試合場へやって来たのは豪華なよろいを身に着けたフランドル伯爵の息子ヨハンだった。出迎えたのはブレンの伯爵の息子ヨハンだった。二人は激しくぶつかったので、槍が折れ、伯爵の息子ヨハンは馬の下の地面に落ちた。ブレンのヨハンに対して来たのはブルグント公爵の息子エドゥワルトだった。この二人の騎士をブレンのヨハンは勇敢に突き飛ばした。それを知ると、ノルマンディー公爵ヨハン・ペリユーは力強く突進した。彼を馬の下に投げ倒し、腕を折って傷つけた。彼は昼か夜か分らないほどだった。ヨハン・ペリユーに対して来たのはカルエ公爵の息子アントーニウス・アレグレだった。たくさんの男らしさを示したので、自分のグループのヨハン・ペリユーともう五人の騎士を武器の力で馬から地面に突き落とした。アントーニウス・アレグレに対して来たのはゴットフリート・フォン・ピカルディーだった。アントーニウスともう六人の強い騎士を馬から地面に突き落とした。たくさんの馬上試合をしたので、みなは彼が試合場から賞を持ち帰るだろうと言った。勇敢な騎士パリスがゴットフリートに対して来た。槍を構えて激しくぶつかり合ったので、二人は馬もろとも地面に倒れた。フランス王は一緒に試合場に戻るように命じた。パリスはそうした。再びぶつかり合うと、パリスはゴットフリートを激しく突いたので、ゴットフリートの馬は彼の下で倒れ、彼は地面に落ちた。しかし、馬が倒れると、ゴットフリートが落ちたのは馬のせいだと言った。というのも、たくさんの者がゴットフリートを支援して、もう一度馬上試合に戻るのがいちばん良いと判断したからだ。パリスは覆い隠していてだれにも彼だと分からなかったので、そのとりなしをする者もいなかった。しかし、フランス王はゴットフリートが確かに負けたのが分かっていたので、その強力な騎士に対して不平等なことをしたくなかったのだ。そこへ伝令官を遣わした。王はパリスが相手の騎士に勝ったのを認めていると伝えるように言った。それにもかかわらず、もし彼が試合場に戻ったら、その気高さのために大きな名誉となるだろう。ヴィエンナがはなはだしい美しさにかけてすべての婦人や乙女よりも優れているので、パリスがためらうことなく答えた：「世界のだれも彼女にはかないません。王のお気に召せば、彼女のためにもう一度同じ騎士と馬上試合をする用意はできています。」何の異議も唱えられずに負かすまでゴットフリートと試合をした。伝令官は再び王の前へ歩み、その決定について話した。王は納得して、その騎士つまりパリスは領主に違いないと言った。というのも、とても威厳があってたくましく、上品で心地よい話し方だったからだ。次の者に対してぶつかろうとすると、パリスは仲間エドゥワルトが用意してくれた馬と取り替えた。再び馬上試合を始めて激しくぶつかり合ったので、ついにゴットフリートは苦しんで馬の下の地面に落ちた。

[11.]

夕方になると、馬上試合が激しくなったので、三つのグループの者たちはいずれも地面に打ち付けられた。ヴィエンナのグループについては勇敢な騎士パリスの他はだれもいなかった。ノルマンディーのグループについては三人の優れて権力のある騎士つまりサルース辺境伯の兄弟バラクスス、アルマーニャック伯爵の息子ヨハン、バイゲルンのフィーリップスがいた。コンスタンツのグループについてはまだ三人つまりブラバン

トのヨハン、ブルグント公爵の甥ラーレル、辺境伯の兄弟ソロモン・ダレンゾネがいた。彼らは馬上試合を翌日続けるように一緒に話した。というのも、みな疲れていたからだ。それを知ると、パリスは再び槍を構え、サルース辺境伯の兄弟バラクススに対してぶつかり、最初の突きで馬の下の地面に倒した。同様に、勇敢に誠実に他の五人にもそうしたので、馬上試合で賞をもらった。

[12.]

フランス王がヴィエンナのために試合で持ちこたえたパリスに三つの宝石が付いた三本の軍旗を与えるように命じた様子。

馬上試合が終わると、パリスは馬上試合でもらった賞でヴィエンナが世界で最も美しい乙女だと証明した。パリスは王が領主や騎士と一緒にいた観覧席へ連れて来られた。パリスに三つの宝石が付いた三本の軍旗が与えられた。パリスは姿を見せ、ヴィエンナが世界で最も美しい乙女だと男らしく馬上試合で証明したしるしの三本の軍旗を持って試合場の周りを走った。パリスは三本の軍旗と三つの高価で気高い宝石を受け取ると、仲間エドゥワルトとできる限りひそかに覆い隠し、フランスのパリからドルフィンの国へ帰った。帰って来ると、パリスはまるで馬上試合へ行かなかったかのように上で述べた聖ラウレンツィウス教会の司教と再びつきあい、毎日馬上試合の新しい情報やだれが賞をもらったか尋ねた。

[13.]

さて、馬上試合が終わりを迎えると、男爵や方旗騎士や騎士は賞賛と敬意を表そうと馬上試合で男らしくて勇敢で気高く賞をもらった者の正体をとても知りたがった。しかし、彼らには分からなかった。彼らにはそれが不満で、素性を明かさないのは彼が特に勇敢で賢い騎士に違いないからだと言った。領主や騎士は王に別れを告げ、馬上試合で賞がもらえなかったのを悲しんで国へ帰った。だれに名誉と賞賛を帰したらいいか分からないのが彼らにはなお不満だった。王はドルフィンを愛し、大きな栄誉を表し、イギリス王からもらった王冠を与えた。馬上試合の名誉と彼の娘への贈り物として考えたからだ。彼女がみなからたたえられた最も美しい乙女だったからだ。ドルフィンとパリスの父親はとてもりっぱに喜んでドルフィンの国へ帰った。父親が帰って来るのを知ると、ヴィエンナはいつものように出迎えた。ドルフィンは彼女にキスをして、王からもらった王冠を彼女の頭の上に置き、彼女がどんなふうに賞をもらい、世界で最も美しい乙女になったかを話して言った：「ご覧。この美しい王冠はフランスの王様がお前に送って下さったんだ。他の乙女のために賞をもらおうと対抗する者がたくさんいたにもかかわらず、お前が賞賛と名誉を受けたしるしとしてな。だが、お前はすばらしい保護者を持ったもんだ。あの者がお前をあらゆる窮地から救ってくれたんだ。というのも、どのグループにも三人の権力のある騎士がおったが、お前のグループには一人しか残っていなかったからだ。それ以外の者はみな負けたんだ。その騎士は楯にも見分けができる紋章を付けておらず、こっそり立ち去ったから、だれにも彼の正体が分からなかったんだ。王様さえもあの者の居場所はご存じなかった。三本の軍旗と三つの宝石を馬上試合の名誉と賞賛と一緒に持ち帰ったんだ。ヴィエンナよ、お前の大きな名誉をだれに感謝すべきか分からないんだ。天の神とその母に祈ろう。あの者に賢明さも名誉も威厳も与えられ、この世のどんな騎士にもまさり、りっぱに気高く行ったように、あの者があらゆる行いで勝利を得るように。というのも、騎士の試合であれほどふさわしく感謝に値する行いを示した領主や騎士が話題になるのを見たことも聞いたこともなかったからだ。」自分のために行われた威厳ある行為や与えられた大きな賞について行ったのが男らしくて勇敢で若い騎士だったという話を聞くと、ヴィエンナが侍女イザベルに話した：「イザベル。私はフランスで最も気高くて勇敢な騎士に愛されると言わなかったかしら。誓って、イザベル。この方はかつて私の部屋の近くで心地よく奏でたり歌ったり、この町の馬上試合で賞ももらい、水晶の楯と冠を一緒に持ち帰った方よ。ここからいなくなったから、どなたもあの方の正体をご存じないのよ。ほら、ご覧なさい、イザベル。なんという賞賛と栄誉かしら。あの方の勇敢さと親切さが私に与えて下さったのよ。あの方の正体が分からないから、私はきっと悲しいのよ。イザベル。心に大きな心配事を抱えているから、私の命はもう長くないのではないかしら。私はただ泣いて叫んで人生を過ごすだけよ。」彼女はとても心配して暮らしてい

た。しかし、秘密にしていたので、イザベルの他はだれにも気づかれなかった。

[14.]

パリスの父はドルフィンと一緒に馬上試合にいたが、息子パリスを見かけなかった。彼にはそれが悲しかった。というのも、昔は気高い馬上試合で彼を見るのが常だったが、今や聖ラウレンチオ教会の司教とつきあっているのが分かったからだ。パリスがかつて常に武器と甲冑を身に付けて晴れやかで楽しそうにしていたのが彼の頭に浮かんだ。ある日パリスに言った：「パリスよ。私はお前に大きな喜びと慰めを望んでいたんだぞ。だが、あの司教とのつきあいをやめないから、お前は愉快を不快に変えてしまったな。」パリスには父親の気持ちが分かっていた。それにもかかわらず、一言も答えなかった。それを見ると、父親はパリスの親しい仲間エドゥワルトの所へ行って言った：「息子パリスと貴殿がつきあっているのは気づいておる。あいつが昔は馬上試合で賞賛と名誉を受けるのが常だったと考えると、私は心に大きな不快感を抱いておる。今はあの司教とつきあい、鳥も犬も馬も餓死させてしまっておる。こんな私に何か助言をしてくれないか。」そう聞くと、エドゥワルトは同情して、できる限り慰めて別れた。パリスのもとへやって来ると、父親の嘆きについて話して言った：「君は愛のとりこになって、病気になったのだな。もしそれに従っていたら、君の命はもう長くないぞ。君のお父上と友人は納得していない。ほんとうに言おう。いいしつけと男らしさがいい評判になるんだ。お父上がとても不快感に襲われていると気づいているな。ヴィエンナ様への愛はあきらめるんだ。どんなことがあっても、神がお与えになった騎士としての天分を無駄にしてはいけないぞ。さあ、君にまだ能力があるかどうか見せてくれ。お父上を納得させてくれないか。お父上は僕が君にそう言うように望んでいるんだ。」そう聞くと、パリスがエドゥワルトに話した：「君の言うことが徳の高くてりっぱなことだと僕自身分かっているんだ。でも、とりこになった思いを捨てるのは難しいんだ。頼むからどうしたらいいか助言してくれよ。」エドゥワルトは言った：「もし君がよかったら、一緒にブラバントへ行こう。というのも、僕も最後にあの娘に会ってから六ヶ月くらいになるからな。そこで一緒に馬上試合をしよう。そうすれば、賞賛と名誉が受けられるぞ。」パリスは「よし、そうしよう。」と答えた。じきに彼らは馬と武器を用意して、ブラバントに手紙を書いた。今やパリスは馬上試合でもらったものはすべて自分の部屋に保管していた。部屋に鍵を掛けて母親に鍵を預け、部屋のドアを開けずにだれも入れないように頼んだ。さて、彼らはじきにブラバントへ行き、大きな馬上試合を行い、婦人や乙女から賞賛と名誉を受けた。パリスはまるでエドゥワルトのためにとどまって暮らそうとするかのようにふるまった。しかし、彼の心がいつも彼を麗しのヴィエンナの方へ引き戻し、彼の心からの愛が彼を彼女の方へせきたてたのだ。

[15.]

パリスの父親が重病になり、ディアネとヴィエンナが慰めに行った様子。

パリスとエドゥワルトが一緒にブラバントにいると、パリスの父親が息子に対する不快感から重病になった。ドルフィンはたびたび病気の彼の所へ行き、できる限り彼を慰め、自分の妻にも慰めに行くように命じた。彼女は彼の所へ行き、娘ヴィエンナやイザベルや他に同伴者も一緒に連れて行った。そこへやって来ると、どんなふうに病気になったか尋ねた。ヤコブは息子が原因で病気になったと答えた。かつては息子も喜びのうちに暮らしていたが、今はまるで修道院へ入ってしまうかのように、聖ラウレンチオ教会の司教の所へ行くようになったのだ。彼は言った：「私には一人息子しかおりません。神が与えて下さったたくさんの財産をだれに相続させたらよいのでしょうか。」ディアネは彼を慰め、ドルフィンも領主たちも彼を愛していて、なお身をもって名誉を知るだろうと言った。彼の健康の役に立ちそうなことを教えた。パリスの母親はディアネに一緒に城を見に行ってくれるように頼んだ。そこへ行くと、彼女らを甲冑と武器でいっぱいの広間に案内した。彼女は次の広間へ連れて行った。狩りのために使うハヤブサやタカやハイタカなどがいた。彼女は他にもたくさんの部屋に案内した。それは豪華に用意ができていて、多すぎて数え上げられなかった。彼女はパリスが眠ったり宝石を保管したりする部屋の前へ連れて行った。そこは侯爵にとってもなお美しいほど飾られていた。その部屋

にはフランス風に覆われた二つのトランクがあり、金の塊や絹の衣服などでいっぱいだった。ヴィエンナがイザベルに話した：「イザベル。この若い騎士の勇ましさが話題になっても、何ら不思議なことではないわ。だって、その衣服と宝石が示す通り、とても威厳のある方ですもの。」彼女は馬に掛ける白い覆いに気づいた。それはヴィエンナの町の馬上試合で勝った時にパリスが持っていたのと同じように思えた。イザベルはその覆いが世界で一つだけかどうかと言った。ヴィエンナはそれに気づいて、母親に言った：「お母様。気分が悪くなりました。この部屋で少しイザベルと二人きりで休みます。」それ以外の者は先へと立ち去り、イザベルはかんぬきを掛けた。ヴィエンナが話した：「馬上試合で勝ったこの若い騎士の正体が分かる他のしるしを見てみましょう。だって、私の心がそう言うんですもの。」さて、彼女らがその部屋を詳しく調べると、小さなドアがあった。そのそばの小さな穴に鍵が置いてあった。彼女らはそれを取ってドアの鍵を開けてその中へ入って行った。そこに十二フィートの長さの小さな部屋があった。その中に小さな祭壇を持った礼拝堂があった。その上にイエス・キリストの絵があり、祭壇のどの隅にも銀の燭台が立っていた。寝たり起きたりする時に、その前でパリスが祈るのだった。そこにパリスがパリの町で勝ち取った三本の軍旗と三人の乙女の三つの宝石とヴィエンナの町の馬上試合で勝った時にヴィエンナが彼に与えた水晶の楯とバラの冠があった。これを見ると、ヴィエンナは自分のためにみなすべて行って賞までもらってくれた者がパリスだと確信した。大きな喜びから床に倒れて気絶して、長い間話もできずに横になったままだった。意識を取り戻すと、彼女がイザベルに言った：「イザベル。この日帰り旅行のことで主なる神様が賞賛されますように。だって、この部屋から出られないんですもの。上手に歌って心地よくリュートを弾き、あの時は近くに、でも今は遠くにいる方の正体がずっと知りたかったのよ。」彼女の気持ちからパリスの話題をなくそうとして、イザベルは言った：「ヴィエンナ様。お嬢様にふさわしくおふるまいになり、まじめな態度をお取りになって下さい。愚かな行いと取られないように、健全な気持ちをお持ち下さい。と申しますのも、パリス様がお嬢様のためにしたとしても、ご身分もお生まれも同じでないのをお嬢様がやはりご理解なさらねばならないからです。ご存じの通り、たくさんの権力のある領主がお嬢様に求婚しています。あの方々もお嬢様のために優れたことをしています。お嬢様が家臣のパリス様に敬意をお表しになる必要はございません。」この話のせいで麗しのヴィエンナはイザベルに腹を立てて言った：「ああ。これまでお前には慰められてきたわ。長い間望んできたことが私の身に起こっているのよ。お前は不快なことはしないと思っていたわ。ほんとうに言うわ。私はこの方を愛しています。もしお前が反対するなら、私はみずから命を絶つわ。お前は私の死の原因になるのよ。だって、別れたくないし、そんなことできないんですもの。あの方は私を愛し、たくさんのことをして下さったわ。ほんとうに言うわ。いとしい恋人パリス様のことをそんなふうに話していても、お前ももうすぐそんなこと言わなくなるわ。だって、あの方の気高い勇ましさと優しさが分かったら、今とは違ってあの方をたたえることになるんですもの。もしご子息ルートヴィヒ様がパリス様と同じくらい有能でいらっしゃったら、フランスの王様もご子息に王国の半分を与えようとなさっているでしょ。あの方と知り合いになりたがっている高貴な生まれの領主がたくさんいるわ。あの方にかなう者に会ったことがあるかしら。ほんとうに言ってご覧なさい。だって、あの方にはあらゆる名誉と美徳があるんですもの。運命によって私はあの方への愛へ導かれたのよ。あの方も十分に私に値する方でしょ。たとえ身分の卑しい方を愛することが名声にならなくても、あの方は私のためにたくさんの美徳と敬意を表し、たびたび命を賭けて下さったのよ。世界で最も優れた騎士の一人である家臣がご自分のもとにいるのはお父様にも大きな名誉だわ。実際、パリス様と同じくらいたくさんの美徳と名誉を持ち合わせた方がお父様の家臣にいるか考えてみましょうよ。ほんとうにいらっしゃらないわ。」二人の侍女が来て、部屋の前でドアをノックして、ヴィエンナに領主夫人である母親の所へ行くように言った。ヴィエンナがイザベルに言った：「イザベル。さあ、ここから出て行かなきゃ。パリス様が私たちの所にいらっしゃるまで、宝石をこっそり持ち去りましょうよ。あの方がどんな態度をお取りになるか見てみましょうよ。」彼女らはヴィエンナの父親が手渡した

金の首飾りと白い軍旗を取り、コートの下に隠し、母親の所へ、それからヤコブと妻の部屋へ行った。ヤコブが元気になった。ヴィエンナはそれを喜んだ。

[16.]

パリスとエドゥワルトがブラバントから帰って来た様子。

さて、仲間エドゥワルトと一緒に長い間ブラバントにいたので、パリスは麗しのヴィエンナに会いたがっていた。というのも、彼女に抱く愛で頭がいっぱいだったからだ。にもかかわらず、エドゥワルトにはあえて言わなかった。もし知らせたら一緒に帰らないのではと恐れたからだ。五日してパリスの所に父親が重病だという手紙が届いた。ざっと目を通すと、彼がエドゥワルトに言った：「エドゥワルト。父上が重病で寝込んでいらっしゃる。もし君が同意してくれるなら、父上の所へ行くのがいいと思うんだ。腹を立てないでくれ。というのも、じきにここを立ち去ることになるからな。」彼らはそこからヴィエンナの町へ帰って来た。ヤコブは彼らの到着を喜び、パリスが馬上試合で大きな賞賛を受けたと聞くとますます納得した。家に帰って来て、晩になったので寝ようとすると、パリスは礼拝堂へ行って祈った。宝石がなくなっていないか見ようとした。彼はいちばん大事なものがないのに気づいた。納得が行かなかったので、夜も眠ることができなかった。朝に彼は部屋に鍵をかけて十分に番をしてくれなかったのかと母親に言った。というのも、どんな代償があっても手放したくない宝石がないのに気づいたからだ。母親は言った：「誓って、パリスよ。そこにはだれも行かなかったわ。でも、ある日お父様が病気で寝込んでいらっしゃると、ディアネ様とヴィエンナ様が慰めに来て下さったの。この城をご覧になり、お前の部屋へいらっしゃったわ。でも、あの方々がお前のものを取ったのは分からないわ。というのも、そこにお残りにならなかったからよ。でも、ヴィエンナ様のご気分が悪くなり、侍女イザベルと少しそこにいらっしゃったわ。パリスよ。そういうことだから、あの方に腹を立てないでちょうだい。」そう聞くと、パリスは思った：「何も取られていないなら、こんなふうに秘密にしておこう。どうしてヴィエンナ様はそんなことをなさったのだろうか。」彼はできる限り美しい身なりをして、ドルフィンの所へ行った。ディアネとヴィエンナにしかるべき敬意を表した。ドルフィンも大喜びで彼を迎え、新しい情報などを尋ねた。パリスを見ると、会いたかったという大きな望みと自分が抱く愛のためにヴィエンナはバラのように赤くなった。恋人パリスを見るのをやめることができなかった。彼を見れば見るほど、いっそう彼女の心で愛がつのった。パリスはドルフィンの前でひざまづき、あえてヴィエンナを見なかった。彼の心にはとても苦しいことだった。彼を知る者はおそらくその顔から気づいただろう。ドルフィンが尋ねたいことを尋ね終わると、パリスは彼とディアネと娘ヴィエンナに別れを告げ、父親の家へ帰った。

[17.]

じきにヴィエンナは愛でとりこになった者のように侍女イザベルに言った：「イザベル。パリス様がいつも考え込んでいらっしゃるように思うの。私の持ち去った宝石が礼拝堂で見つからないからではないかしら。あの方にお返しして私たちが持っていたとお知らせするのがいちばんいいと思うわ。」「そうなさるのがよろしいでしょうが、ほんとうにこっそりなさるべきでしょう。」とイザベルは言った。ヴィエンナは言った：「その方法を見つけるわ。」ある日ヴィエンナは心にやましいところがあると母親に言った。聖職者に告解したがっていた。彼女は聖ラウレンツィウス教会の司教が信心深くて敬虔な方だと聞いていると言った。娘が話したがっていると伝えてくれるように母親に頼んだ。すぐにディアネは司教を連れて来させた。ヴィエンナは神のおきてに従って心から告解した。告解し終わると、翌日も来てくれるように頼んだ。というのも、彼のすばらしい教えに慰められたからだ。もう一つのことをひそかに知らせようとした。翌日司教はヴィエンナの所に戻ってきた。彼女は彼に言った：「神父様。ある場所からあるものが持ち去られました。ヤコブ様のご子息パリス様のもので、持ち去った者は良心の呵責にさいなまれております。恐れ入りますが、あの方にできれば明日ご一緒に私の所にいらっしゃるようにおっしゃって下さい。」司教にはヴィエンナが何を意味しているか分からなかったが、間違いなくそうすると言った。

[18.]

麗しのヴィエンナがパリスに心を開いた様子。

翌日司教はとても敬意を込めてパリスと一緒にヴィエンナの所へ行った。ヴィエンナは愛しているそぶりを見せないようにあいさつした。司教と一緒にいた同伴者から少し離れて行って、パリスに言った：「パリス様がブラバントにいらっしゃった短い間のことでした。私と領主夫人である母は一緒にご病気のお父上の所へ参りました。同じ時お城とパリス様の礼拝堂も拝見しました。宝石も拝見しましたが、私の気に入るものでした。一緒に持って参り、無事に保管しているのです。パリス様のものだと存じております。パリス様にお返しいたしたいのです。パリス様を怒らせたのであれば、どうかお許し下さい。と申しますのも、ほんとうに悪気があった訳ではないからです。」パリスは謙虚にとても礼儀正しく答えて言った：「ヴィエンナ様。こう申し上げては失礼ですが、父の所にいらして下さったことは大きな美徳です。そのお陰で父と私たちだけではなく一族もみな大きな名誉をいただきました。尊いヴィエンナ様。その上なお、父も私たちも持っているものもすべてみな御意のままです。もしこの宝石をお持ちになることが高貴なお生まれのヴィエンナ様のお気に召すなら、ほんとうになさって下さい。ヴィエンナ様はそうなさるお力をお持ちだからです。私はだれもが考えている以上に心から納得いたしております。その宝石が現物の半分の価値しかなければよいのですが。尊いヴィエンナ様。そうおっしゃらないで下さい。と申しますのも、宝石だけではなく父母も私も持っているものもすべてヴィエンナ様に服従と奉仕をお見せする所存だからです。尊いヴィエンナ様。フランスの騎士がこの宝石を友情のきずなとして送ってくれたのも最近のことなのです。」ヴィエンナが彼に答えた：「宝石の由来をおっしゃる必要はございません。と申しますのも、私も同じくらい存じているからです。パリス様が長い間私に対してご自分の愛を隠していらっしゃったことに驚いております。パリス様が私に抱いて下さる忠誠にすがってお願いいたします。お尋ねしたいことの真相をおっしゃって下さい。と申しますのも、私はそれを存じたいからです。」パリスは言った：「ああ、尊くて高貴なお生まれのヴィエンナ様。御意のままになることをお尋ねになる必要はございません。」ヴィエンナは言った：「晩遅くに心地よく歌ったりリュートを演奏したりしようと私の部屋の前にいらっしゃった方がパリス様かどうか最初に存じたいのです。それに加えて、五月一日にこの町で行われた馬上試合でお勝ちになって水晶の楯とバラの花輪をお持ち帰りになった方かどうか存じたいのです。その上なお、九月八日にパリの町で行われてたくさんの方旗騎士や伯爵や騎士が集まった馬上試合でお勝ちになってお部屋で拝見した三つの宝石と三本の軍旗をお持ち帰りになった方かどうか存じたいのです。私のためにそうなさったとおっしゃって下さい。と申しますのも、だまるべきことではないからです。もし父上や私たちみなのためにして下さったなら、名誉をお受けになったことに感謝せねばなりません。パリス様はどなたかご婦人のためか私のためにそうして下さいました。私は心からパリス様に感謝いたしております。パリス様が感謝され、ふさわしく報われるのはごく当たり前のことです。」ヴィエンナは言った：「恋人パリス様。知っていただきたいのです。私は長い間それが存じたかったのです。今それを最も望んでおります。お願いですから、真実をおっしゃって下さい。」パリスがとても謙虚に答えた：「尊いヴィエンナ様。私は身分が低いので、おっしゃる賞賛には値いたしません。私の答えを無礼だとお受けにならないで下さい。と申しますのも、それにもかかわらずヴィエンナ様の気高さは私にとって変わることがないからです。」彼女の前でひざまづいて言った：「尊いヴィエンナ様。最も低い家来、私パリスがまさにお尋ねの者でございます。ヴィエンナ様への愛に従順ですべてにお仕えいたします。と申しますのも、ヴィエンナ様を存じて以来、私の心がいつもヴィエンナ様への奉仕を迫って参りましたからです。」ヴィエンナは言った：「恋人パリス様。今はお答えする時間がございません。と申しますのも、すべてをお話しすると長くなるからです。でも、知っていただきたいのです。パリス様への愛にひきつけられ、それ以上に好ましいものが私にはこの世にございません。元気をお出しになって楽しそうになさって下さい。と申しますのも、私はそれが事実だと悟って下さるのを望んでいるからです。」麗しのヴィエンナからこの言葉を聞くと、パリスは喜びに満ちた心で言った：「ああ、尊いヴィエンナ様。どんな舌も表現

できない優しいお答えから、なんという喜びを私の心はいただいたことでしょう。ヴィエンナ様の愛からこんな優しいお答えをいただくとは思ったこともございませんでした。ヴィエンナ様の愛は大きく、王様でさえも満たされるほどです。私はヴィエンナ様への愛のためにお気に召すことを行い、お気に召さないことは一日たりとも行わないと神に祈ります。」彼らは以前にも増して強く愛し合いながら別れた。再び会える日を思ったが、それは早ければ早いほどよかった。ヴィエンナは大喜びで母の部屋に戻ってきた。パリスは司教と一緒に宮殿へ帰った。エドゥワルトのもとへやって来ると、彼はヴィエンナとの話をすべて伝えた。エドゥワルトは言った：「パリス。彼女の話に偽りはないな。でも、君のことは秘密にした方がいい。というのも、不実の舌はたくさんあるからな。」パリスと仲間エドゥワルトは馬上試合でたくさんのことをこっそり行った。それが特に麗しのヴィエンナには好ましく快かった。さて、娘が十五才だと気づくと、領主たちからしばしば申し出があるように、ドルフィンは娘の結婚について考え始めた。それが分かると、パリスは悲しくなって心中ひそかに思った：「これはヴィエンナ様とお話しする前に、前もって考えていたことなのに。気高い領主や侯爵が求愛する気高くて高貴な生まれのヴィエンナ様と結婚することがどんなふうに僕の身の上に起こるだろうか。」パリスは後悔した。しかし、やっとのことでヴィエンナに話しかけて言った：「ああ、麗しのヴィエンナ様。運命が気を悪くして、ヴィエンナ様がもう私をお忘れになったとはどういう意味でしょうか。ああ、麗しのヴィエンナ様。お別れした時にして下さったすてきな約束をどこにお忘れでしょうか。お父上がヴィエンナ様をある方と婚約させたいとおっしゃるとはどういうことでしょうか。」ヴィエンナは答えて言った：「パリス様。もし父上が婚約させたいとおっしゃっても、不思議ではございません。と申しますのも、それをやめさせることはできないからです。でも、私は認めません。ご存じの通り、聖なる結婚はお互いが同意しなければ確かなものになりませんもの。納得なさって下さい。パリス様以外の方と決して結婚しないと約束いたします。それが神の御心なら、じきにほんとうに徳の高いものになり、恥ずべき罪にはならぬように望んでおります。重苦しいことをお試しいただきたいのですが。でも、していただかねばならないのです。それはこうです：すぐにパリス様のお父様の所へいらっしゃって、領主である父上の所へ行き、ためらわずに私をパリス様と結婚させようとなさっているか試すようにおっしゃって下さい。」ヴィエンナの決意を聞くと、パリスは驚いて言った：「尊いヴィエンナ様。私の命を奪おうとなさるのですか。おやめ下さい。お許し下さい。」ヴィエンナが答えた：「もしお受けいただけないなら、もはや申し上げません。パリス様の賢明さと分別は今どこにございましょう。これは絶対にしていただかねばならないのです。」パリスは言った：「尊いヴィエンナ様。今絶対にこれをお望みなら、たとえ千回死んでもやってお見せします。」彼はヴィエンナに別れを告げ、父親の所へ行って言った：「父上。父上は私に愛を示してきて下さいましたから、神様が報いて下さるに違いありません。父上。一つお願いがございます。ほんとうに誠実なことですから、打ち明ける前に約束していただきたいのです。さもないと、申し上げられません。」父親が答えた：「パリスよ。お前のためにしたくないことがこの世にあろうか。遠慮なく言ってみなさい。」パリスは父親の心をそそって企てを行ってもらおうとヴィエンナと話し合ったことをすべて話して言った：「父上。父上にしていただきたいのはこういうことです：ドルフィン様の所へいらっしゃってご令嬢を私の妻にいただけないかとおっしゃって下さい。この願いはお断りにならないで下さい。」息子からそう聞くと、彼が何を話しているかヤコブには分からなかった。息子のばかげた言葉に腹を立てた。彼をしかり、そんなことは二度と話さないように言った。というのも、ドルフィンの娘のために命を失いたくなかったからだ。彼には気持ちを他のものに向けてもらいたい。この話は単なる愚行にすぎなかろう。パリスが答えた：「尊い父上。これは私にも父上にもやっかいなことです。父上がお断りになっても、私は驚きもいたしません。ですが、私は愛のとりこになり、自制できておりません。もし父上がご好意を示してさえ下されば、ことがどうなろうとも納得いたします。」パリスは約束してくれるまで父親に頼んだ。

[19.]

ヤコブが息子とドルフィンの娘を婚約させようと彼を訪問した様子。

ヤコブは勇気を持ち、ドルフィンの所へ行って言った：「最も優しいドルフィン様。ドルフィン様にお願いを申し上げるように頼まれて参りました。ドルフィン様にはわずかしかお心配りいただけないと存じます。もしお気に召さなければ、この愚行を私に負わせてお許し下さい。」ヤコブが思慮深く誠実に話すのを聞くと、ドルフィンは話すことを許可した。ヤコブが話した：「高貴で徳の高いドルフィン様。息子パリスがご令嬢ヴィエンナ様と結婚いたしたいと申し上げるように頼んで参りました。こんなことを申し上げるだけではなく、愚考いたすのもまた大きな愚行であり、向こう見ずなことでございますが、息子に抱く愛のために申し上げずにはいられないのです。」その言葉のせいでひどく怒ったので、もはやドルフィンはヤコブの言うことを聞こうとはしなかった。彼をののしり、しかって言った：「実際、お前は哀れな家臣だ。こんなふうに私の名誉を重んじてくれるのか。お前にどんな罰を科してやろうか。よもやお前自身は思いも寄るまい。すぐここを立ち去り、息子を二度と目の前へ来させるな。」ヤコブは恥ずかしそうに家に戻り、ドルフィンに言われた言葉をすべて息子パリスに伝えた。パリスは父親に感謝して、大きな報酬と名誉を望んだ。

[20.]

ドルフィンは考え事をしながら宮殿へ行った。不機嫌そうだったので、だれもあえて一言も話さなかった。娘ヴィエンナを前へやって来させて言った：「不快な話をしてきた。卑しいヤコブが私のもとへやって来て、お前を息子パリスの妻にくれと言ったんだ。いいか。それが賢明なことかどうか。そうするぐらいなら、いっそお前を修道院に入れよう。じきに、お前は好ましい結婚をすることになる。お前も十分に納得するはずだ。ほんとうに言おう。もしこれまでのように忠実に役目を果たさなかったら、あいつの首を切り落としてやろう。」父親がヤコブと彼の息子に腹を立てているのを見ると、ヴィエンナは話しに来てくれるようにエドゥワルトのもとへ手紙を送った。彼が来ると、父親がヤコブとパリスに腹を立て、それが特に残念だと言った。父親がパリスに災いを加えるのではないかとても心配だと話して言った：「隠れていて下さい。父上の怒りを静められないか見てみましょう。」エドゥワルトは別れを告げ、パリスの所へ行ってそう話した。彼に言った：「しばらくの間この国から離れるのがいいと思うんだ。ヴィエンナ様のお言葉から察する限り、もしかするとドルフィン様が簡単に怒りをお忘れでないかもしれない。」パリスは言った：「君が良かろうと思うことをするし、恋人と別れるのが苦しくても逆らわない。でも、ここから離れる前に、たとえ死ぬことになっても、麗しのヴィエンナ様に別れを告げたいんだ。」

[21.]

パリスが窓越しにヴィエンナと話す様子。

パリスはとても苦労して、脇窓越しに彼女と話しに来た。ヴィエンナは言った：「父上が災いを及ぼそうとなさっています。この世でパリス様ほど愛しているものがございませんから、私はとても心配なのです。もし苦しみがパリス様の命に及ぶなら、私はもはや生きていたくはございません。」パリスは言った：「尊いヴィエンナ様。領主であるお父上が怒りのご気分をお静めになるまで、私がしばらくの間ここから離れるのがよろしいかと。ヴィエンナ様とお別れするのはとても苦しいのですが。と申しますのも、私の人生が悲しくなるからです。でも、何が私の身に起ころうとも、ヴィエンナ様のためにご命じになることすべてに満足ゆくようにいたします。」パリスの親切な心を見ると、ヴィエンナは言った：「恋人パリス様。私に抱いて下さる愛を存じてお誓いいたします。私なしでここから離れさせません。と申しますのも、それが私の思いだからです。旅する用意をなさって下さい。私も一緒に参ります。できる限り早く、必要なものをご用意なさって下さい。この王国から離れる方策をお考え下さい。でも、ここから離れる前に、二つのことを守ると約束して下さい。第一に、聖なる結婚で完全に一体とならないうちは、私をはずかしめてはなりません。第二に、イザベルも同様に私たちの財産をすべて受けるものといたします。もしお守り下さるなら、じきに用意して、宝石と必要なお金を用意いたします。」パリスは守ると約束した。彼らは別れた。

[22.]

ヴィエンナと別れると、パリスはユルゲンとい

う者の所へ行って言った：「ユルゲン。僕はいつも君を信頼してきた。今から話すことも必ず秘密にして欲しい。というのも、君が失うものは何もないはずだからだ。」ユルゲンは彼のために善良な心からできることはすべてすると約束した。パリスは言った：「いいかい。僕はこの町のある者を憎んでいる。その者は僕にめんどうをかけたから、僕は打ち殺してやりたいんだ。それから僕はこの王国から出て行く。君にはエーグ・モルトの海へ行き、用意ができたガレー船をチャーターして、僕が行くまで待たせておいて欲しい。ここから先エーグ・モルトの方へ五マイルの所に馬と道具類を用意してくれ。これをできる限りこっそり用意して欲しいんだ。お願いだ。ここにあるお金を使って用意ができるな。」ユルゲンは喜んでしようと言った。パリスが命じておいたように 、エーグ・モルトの海へ行き、ガレー船をチャーターして、旅に必要なものをすべてガレー船に調達した。彼はヴィエンナの町に戻って行き、すべて調達したとパリスに言った。パリスは一緒に行ってくれるように頼み、彼に対しても十分に報いようとした。パリスはヴィエンナの所へ行き、彼女が命じたように、みな用意ができたと言った。それに加えて、次の夜に向けて用意するように彼女に言った。彼らは意見が一致して、寝入りばなの真夜中前に用意しようとした。パリスはユルゲンに馬小屋へ行き、二頭の馬を受け取り、町の外で鞍を置くように命じた。自分が行くまで待っている場所を指示した。これについて仲間エドゥワルトは知らなかった。

[23.]

夜間にパリスが従者と一緒に麗しのヴィエンナとイザベルをひそかに連れ去った様子。

旅に備えて用心深くお金と旅行中に役に立つものを用意すると、パリスはひそかに一人きりでヴィエンナが呼び出した場所へ行き、彼女に合図を送った。すぐにヴィエンナとイザベルは男性用の衣服を着て、城からひそかに抜け出した。馬の用意ができている場所へやって来て、それに乗り、その場所から離れて行った。道を知っていたので、ユルゲンはいつも彼らの前を走った。彼らが馬を走らせると、風と雨を含んだ大嵐が起こった。それは翌日の晩まで続いた。彼らは小さな村に着いた。しかし、人に知られないように村へは入らなかった。彼らはその小さな村から遠くない所にある小さな礼拝堂で寝床を取った。そこに助任司祭がいて、彼らを好意的に迎え、できる限り親切にもてなしてくれた。夜にパリスと助任司祭は礼拝堂の北側にある小さな家で一緒に眠った。ユルゲンとパリスの従者は家畜小屋の馬の近くで眠った。ヴィエンナとイザベルは礼拝堂で眠った。朝に彼らは馬に乗って遠くまで走り、川の近くへやって来たが、雨で氾濫していた。パリスにはそれが不満だった。彼らが渡ることができるように、何か方策を見つけてくれるようにユルゲンに頼んだ。ユルゲンは彼から離れ、川の中で渡れると思える場所へ行った。彼が川の中央へやって来ると、その馬が倒れた。人も馬もおぼれて死んでしまった。それを見ると、パリスは嘆き悲しんだが、ヴィエンナのために秘密にしておいた。彼女を不安にさせたくなかったのだ。ヴィエンナはたびたびユルゲンのことを尋ねた。パリスはいちばん良い道を調べようとして前もって彼を遣わしたと言った。自分たちがいた礼拝堂へ帰る必要があると言った。ヴィエンナはそれが良いと言った。というのも、その川を渡るのが恐ろしかったからだ。パリスはとどまりたくなかった。というのも、あまり安全ではないと思ったからだ。その川を楽に渡る方法がないか助任司祭に尋ねた。助任司祭は言った：「三日が過ぎて、水が引かないうちは無理です。」パリスは助任司祭に船で渡してくれる船乗りがいないか村に見に行ってくるように頼んだ。というのも、どこか他の場所へ行くことができるなら、とどまりたくなかったからだ。その上、お礼は十分にすると言った。助任司祭は喜んでやってみると言った。パリスには川を渡ることしか考えられなかった。ここでさし絵が続きます。パリスの話は止めましょう。

[24.]

ドルフィンが家来を遣わし、麗しのヴィエンナを捜した様子。

ここで、パリスの話は止めてドルフィンの話をしましょう。翌日ドルフィンは娘が姿を消したと伝えられた。彼は正気を失いそうになるほど怒った。宮廷にいる者はみな納得が行かなかった。その時からドルフィンは彼女を捜そうとできる限りひそかにあらゆる国に騎士も歩兵も遣わした。生きていようと死んでいようと、ヴィエンナを連

れて来るように命じた。ヴィエンナを捜していた歩兵の一人が助任司祭のいる村に着き、川にかかる橋のことを尋ねた。歩兵はみなにドルフィンの宮廷からひそかに連れ去られた二人の乙女を見なかったか尋ねた。助任司祭は少し前に他の者と一緒に通り過ぎたと言った。歩兵は助任司祭がからかっていると思った。その使いはドルフィンが彼らをかくまって打ち明けない者は殺すと誓ったと言った。そう聞くと、助任司祭は驚いて、歩兵に少し待ってくれたらドルフィンのために喜んで探すと言った。何か分かったらすぐに知らせると言った。助任司祭はパリスの所へ行き、聞いたことを伝えた。彼の仲間の中に探している乙女がいるようだと言った。彼はパリスにそこを立ち去って、命にかかわる心配をかけないでくれるように頼んだ。いちばん良い方策を選ぶように言った。というのも、およそ五十人のよろいを身に着けた者が馬で捜していたからだ。そう聞いた時のパリスの心臓がはりさけるかはりさけないか、みなさんはどうお考えでしょうか。しかし、彼が助任司祭に悲しそうに言った：「答えるのに少し時間をください。」パリスはこれを知らせようと麗しのヴィエンナの所へ行った。パリスが顔を歪めて、ある時は青く、ある時は赤くしながら来るのを見ると、ヴィエンナは言った：「ああ、パリス様。お顔の色をお変えになるとは、どんな知らせをお持ちになったのでしょうか。」パリスは心から悲しそうに言った：「ああ、美しい花ヴィエンナ様。私の知らせはヴィエンナ様にも私にもいいものではございません。と申しますのも、私たちの心地よい冒険がじきに苦々しいものに変わってしまうからです。私は死んでしまいたいのです。」彼はひどく嘆きながらこう話した：「ああ、ヴィエンナ様。高貴なお生まれのヴィエンナ様をこんな苦境に陥れてしまうとは、私の心はどんなに悲しく、どんなに心配でしょうか。ああ、主なる神よ。お父上の宮廷からヴィエンナ様をお連れする前に、どうして苦々しい死が私をこの世から奪わなかったのでしょうか。ああ、父上と母上。もし私がご令嬢を連れ去ったのをドルフィン様がご存じになったら、どんなことが父上と母上の身に起こるのでしょうか。ああ、エドゥワルト。こんなばかなことを始める前に、どうして君に相談しなかったのだろうか。」再びヴィエンナの方へ向きを変えて言った：「もしお父上がご覧になったら、何がヴィエンナ様の身に起こるのでしょうか。どれほどかたくなでも、お父上がヴィエンナ様の愛らしい姿と美しさをご覧になり、災いを及ぼさなければよいのですが。ああ、主なる神よ。この行いにふさわしい苦しみをだれにでもなく、私にだけお与え下さい。ああ、ヴィエンナ様。初めてお見知り置き下さった時が、ヴィエンナ様にとっても私にとってもなんと不幸な日だったのでしょうか。」さて、嘆き終えると、パリスはヴィエンナに助任司祭から聞いたことを伝えた。絶望した者のように剣を抜き、自殺しようとした。しかし、ヴィエンナは彼を妨げ、こう話して慰めた：「ああ、フランスの気高い騎士パリス様。私の喜びであり、愛であり、慰めよ。何をしようとなさるのですか。自らを殺す者は命も魂も滅ぼすのをご存じないのですか。ほんとうに申し上げます。もしパリス様がお亡くなりになるなら、私も一緒に命を絶ちます。パリス様はご自分だけではなく私の死の原因にもなるのです。ああ、パリス様。その賢明さと分別は今どこにございましょうか。男らしくあるべき今、パリス様は気が小さくなり、がっかりなさっています。ああ、騎士パリス様。この世に従って生きる人がいかに身分が高くても、ときおり不快になるというのは目新しいことではございません。ほんとうに。今のお心は勇敢な騎士にふさわしくはございません。パリス様は男らしい方です。こんな苦しみにある私を慰めて下さるべきです。今は私がパリス様を慰めねばなりません。恋人パリス様。ここからお離れ下さい。もしそうなさらないなら、私はパリス様の剣で自ら命を絶ちます。パリス様が私と別れるのはパリス様と同じくらい私にも耐えがたいのです。でも、二つのわざわいから良い方を選ばねばなりません。私は父上に背きましたが、私の命を奪うという災いを及ぼしにならねばよいのですが。昔から私に抱いて下さった愛をお考えに入れて下さるでしょう。でも、もしパリス様がなさって下さらないなら、ご存じでしょう。ほんとうに。私たちは二人とも死なねばなりません。それでも、私は首尾良く終わりを迎えるというしっかりした望みを抱いております。確信なさって下さい。もし父上が許して下さるなら、パリス様以外の方とは決して結婚いたしません。誓って約束いたします。もう一度お願いです。どなたかへの愛のために私のことをお忘れにならず、もし異国へいら

っしゃっても、パリス様の冒険をたびたび手紙でお知らせ下さい。パリス様にますます私のことを思っていただくために。ご覧下さい。ダイアモンドの付いた指輪です。これを私への愛のためにお取り置き下さい。」

[25.]

パリスが礼拝堂でヴィエンナと悲しそうに別れた様子。

この話のあとで彼はため息をついて泣きながらヴィエンナを抱き締めてキスをした。彼女はできる限り彼を慰め、この世のどんなものにもまさる彼女の心の望み通りにすぐにまた会えるように主なる神様に祈った。パリスはとても悲しそうにヴィエンナと別れ、渡ることができない川へ通じる道を従者と一緒に行った。彼らは何も考えずに走り抜け、二日間あえて食べたり飲んだりせずに走った。というのも、町を走り抜ける勇気がなかったからだ。彼はエギュ・モルトへやって来て、ユルゲンがチャーターしたガレー船を見つけた。それでもって一緒にジェノバへ行った。パリスがガレー船で悲しそうに泣いたり叫んだりしているので、みなは頭がおかしいのではないかと思った。というのも、いつも考え込んで一言も話さなかったからだ。ジェノバへやって来ると、彼は家を借り、しばらくの間とても心配のうちに不快に暮らした。

[26.]

さて、ヴィエンナが礼拝堂で見つかり、父親の前へ連れて行かれた様子をお話ししましょう。

パリスと別れると、ヴィエンナは礼拝堂でイザベルと二人きりで言い表せないほどとても悲しそうにしていた。というのも、彼女には生きるぐらいなら死ぬほうがましだったからだ。泣きくたびれて父ドルフィンの所に戻らねばならないのを知ると、彼女はできる限り自分自身を勇気づけ、助任司祭に歩兵を引きとめ、礼拝堂に連れて来るように命じた。助任司祭が彼女の所へやって来て、たくさんの騎士が捜していると話した。父親の所へ帰る他ないのが分かると、麗しのヴィエンナは言った：「騎士の所へ行き、私を見つけたと言って連れて来て下さい。」助任司祭はそうした。そこへやって来ると、騎士はヴィエンナにあいさつして、父親ドルフィンが彼女を見つけようと世界中くまなく捜していると言った。彼女を慰め、父親は災いを及ぼさないと約束した。「と申しますのも、ドルフィン様はヴィエンナ様にお目にかかれるのを楽しみになさっていて、おそらく怒りをお忘れになるからです。」彼女は馬に乗り、父親に対して自分を弁護して、なおけがれを知らない乙女だと言ってもらおうと助任司祭を一緒に連れて行った。

＊底本として Axel Mante (hrsg.), *Paris und Vienna*, Lund: Gleerup, 1965 を使用した。